

「授業」で生徒を、学級を伸ばす 第2回

言語活動で

授業を捉えなおす

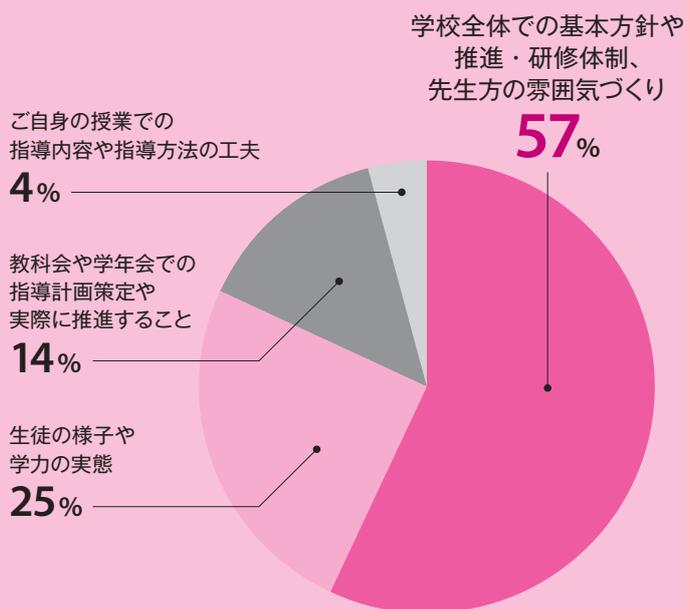
新学習指導要領のポイントである「言語活動の充実」。

子どもの日々の様子から言語活動の重要性を感じつつも

全校挙げての研究や実践には結び付いていないのが現状のようだ。

今号では、各教科等の目標達成に向けて言語活動を取り入れた授業づくりについてインタビューと学校事例から考える。

Q 言語活動の充実を図る上で、最も課題と感じていることは何ですか？



※2011年2月、全国の「VIEW21」中学版読者モニター（中学校教師）へアンケート用紙を郵送し、ファクスで回収。有効回答数は51

めりはりをつけた言語活動で 将来を生きる力を育む

東京女子体育大理事／教授 田中洋一

言語活動とはどのような活動を指し、授業にはどのように取り入れられるものなのか。指導のヒントを、言語活動に詳しい東京女子体育大の田中洋一教授にうかがった。

言語活動は 教科目標達成のための手段

これまでの日本の教育は知識の習得が中心で、応用する力や生活に役立てる実践力を育てる授業が十分ではなかった――。そのことを明らかにしたのは、2000年に始まったPIISA調査の結果です。子どもの考える力や情報活用力などが課題となり、その解決の手立ての一つとして、言語活動の充実がクローズアップされるようになりました。

先生方は、日々の生徒の様子などから言語活動の重要性を感じつつも、その目的や手法を誤解されている場合があるようです。言語活動の位置付けは、新学習指導要領の総則「教

育課程編成の一般方針」を読むと分かります

(図1)。教育の最終目標は「生きる力の育成」であり、その中の「学力」の要素は「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「課題解決に必要な思考力・判断力・表現力その他の能力」「主体的な学習態度」の三つです。つまり、この三つを育てることで生きる力を付けましょうということなのです。そこで大切なのが、「学習習慣の確立」と「言語活動の充実」なのです。

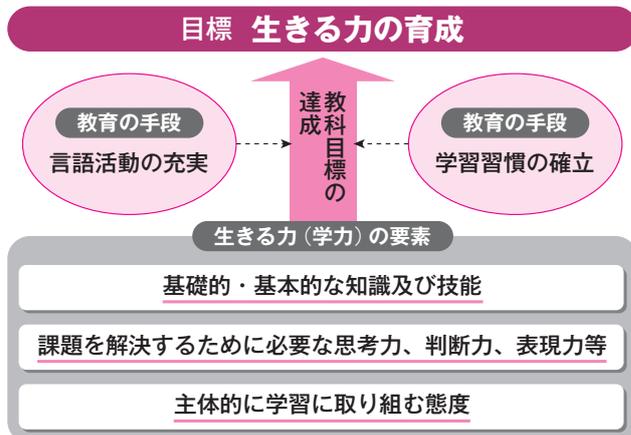
注意したいのは、言語活動はあくまで生きる力を養うための「手段」として位置付けられていることです。生きる力は各教科の授業などを通して育むものですから、言語活動は各教科などの目標を達成するための手段と言い換えられます。これがややもすると誤解さ

図1 学習意欲と学力、学習方法の有無の関係

教育課程編成の一般方針 (抜粋)

学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、生徒の発達の段階を考慮して、生徒の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、生徒の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない。(新学習指導要領 第1章総則 第1より)

*下線と囲みは編集部による



*田中教授の資料を基に編集部で作成

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第2回

言語活動で授業を捉えなおす



たなか・よういち◎横浜国立大大学院修了。専門は国語教育。東京都立中学校教諭、東京都教育委員会等の指導主事、指導室長を経て現職。中央教育審議会国語専門委員、教育課程実施状況調査結果分析委員会副主査、評価規準・評価方法の改善に関する協力者会議主査などを歴任。学習指導要領中学校国語作成協力者。著書は『国語力を高める言語活動の新展開 全4巻』（東洋館出版社）など多数

れ、言語活動の充実自体が目的とされる場合が多いようです。言語活動の視点で授業を捉え直し、工夫を凝らすことで、生徒が身に付ける力の質が変わることが重要なのです。

言葉が飛び交う授業が良い活動とは限らない

言語能力そのものやコミュニケーション能力の向上が、各教科の言語活動の目標であるかのように錯覚されている例も見受けられます。例えば、数学では、言語活動の例として「数学的な表現を用いて、根拠を明らかにし筋道立てて説明し伝え合う活動」が挙げられ

ています。これは、説明の方法そのものを学ぶことではありません。「数学的な推論の必要性と意味、及びその方法を理解し、論理的に考察し表現する能力を養う」（第2学年の例）という教科の目標を達成するための手段としてあるのです。具体的には、校庭にある木の高さを測る方法を皆で話し合うことで三角比に関する理解を深める、といった活動が挙げられます。

しかし、国語は言語教科のために少し事情が異なり、教科目標に言語能力の育成そのものも含まれます。上手に話す・聞くというコミュニケーションの技能を教える役割です。

同じく言語教科の外国語は、ペアワークなどの活動が多いため、十分に言語活動を行っていると思いがちです。しかし、活発に英語が飛び交っているように見えても、暗記した定型文を意味の理解を伴わずに口にしているだけでは、「言語や文化の理解」という教科のねらいを達成できません。ねらい達成のためには、英語の使用にこだわらず、同じ意味の日本語と英語の表現の違いを比べて、文化の差異を考えさせる活動などを取り入れるのも一案です。

言語を使って考え、人に分かるように説明したり、生徒同士で考えを共有し深め合ったりすることで、教科の内容に対する理解が深まり興味・関心を高める。その結果、教科目標に近づくことが、言語活動の効果なのです。

協調の精神や自己肯定感を育む上でも効果的

教科の目標達成以外にも、言語活動にはさまざまな効果が期待できます。言語能力やコミュニケーション能力の向上はその一つでしょう。話し合いなど友だちの考えを聞くことで、自分にはないものが相手にあるという基本認識が生まれます。また、話し合い活動を行うためには、それぞれの意見を認め合う態度が必要ですから、互いの力を生かし合う力や協調の精神を育むことも可能です。自分の意見を言わなくてはいけない状況を繰り返し

経験することで、主体的な学習態度を身に付けることも出来るでしょう。

「自分の意見を持てた」「友だちに考えを説明できた」という体験は、受け身の授業だけでは得られない自己肯定感を高めることも期待できます。そのために、生徒が自由に発言できる雰囲気づくりを心掛けましょう。授業では一つの正答を追い求めてしまいがちですが、答えが出るまで生徒を当て続けることを繰り返ししていると、生徒は間違った答えを言うのはいけないと考え、発言をためらうようになります。途中までは出来た、自分なりの意見が言えたということに対しても、教師がきちんと評価することが大切です。

ただし、これらが言語活動の主目的になると本末転倒です。言語活動はあくまで各教科の目標を達成するためにあることを忘れないでください。

「これが言語活動」と意識すれば活動内容は変わる

言語活動はこれまでにない全く新しい活動なのかと言うと、そうではありません。数学の証明問題のように、他者が理解できるように筋道立てて論を組み立てる過程は、言語活動そのものです。国語でも、ほとんどの文学鑑賞は言語活動になっています。文学は物語の展開を読み取るだけではなく、それについてどう感じたのか、主人公に共感できたかと

いうように、自分の感情や状況に置き換えて読んだり考えたりするからです。

大切なのは、教師が「これは考える力を養うための言語活動である」と意識することです。それによって教える内容は同じでも、おのずと発問の仕方や教材の作り方が変わり、授業の質も向上するのではないのでしょうか。

言語活動は時間が掛かるといイメージもあります。確かに、各教科がそれぞれ筋道立てて説明する方法や批評の仕方などを教えていたのでは、時間がいくらあっても足りません。討論や批評など言語活動に必要な基礎的な技能は、本来、国語で教えるべきものです。完璧ではなくても、国語で基本的なことを押さえておけば、例えば、音楽の授業で批評文とはどういうものかというところから説明しなくても、音楽の批評に必要な観点を教えるだけで、すぐに活動に入ることが出来ます。

限られた時数を有効活用するためには、国語科の先生は他教科でどのような言語活動を行っているかを知るようにしましょう。他教科の先生は「うちの教科はこんな活動を取り入れたいから、国語科でこのような技能を指導してほしい」と相談することも有効です。

大きな言語活動と小さな言語活動を織り交せてメリハリを

言語活動にメリハリを付けることも大切です。私は、言語活動には「大きな言語活動」

図2 言語活動のバリエーション

大きな言語活動

- ◎単元全体や他の教科等との連動
- ◎年1回でもよい
- ◎準備が大変だが生徒の理解度や達成感が高い

例

- 学習内容を基にした学級全体でのディスカッション
- に関する身近な使用例を探すフィールドワーク

小さな言語活動

- ◎教師の発問や教材の工夫など。日々の授業で行う
- ◎従来の指導の延長にあり、高頻度での実践が可能

例

- AとBを比較して共通点/相違点を考えさせる
- を踏まえた上で、大切だと思う点/自分の意見を考えさせる

と「小さな言語活動」があると考えています。小さな言語活動を頻繁に仕掛けながら、年1回は大きな言語活動を行うというように、大小を組み合わせることで効果が高まります(図2)。

単元全体を調べ学習にしたり、大きなテーマについて学級全体で数時間に渡りディスカッションしたりするのは、大きな言語活動です。大きな言語活動は、準備が必要であり活動に時間も掛かるので、頻繁には出来ません。一方、小さな言語活動は、自分の考えをワークシートに書かせるような活動や、授業で簡単な問いを投げ掛けて答えさせるものなどを含みます。これなら、発問の仕方を工夫するだけで毎回の授業でも取り入れられると思います。

一例を挙げましょう。社会科ではヨーロッパ

言語活動で授業を捉えなおす

パ人の生活を教材とします。「ここは試験に出るからマーカーを付けておこう」と言うのと、「前回学習した『アジア人の生活』との違いを考えながら大事な箇所にマーカーを引いてごらん」と言うのでは、授業の内容はかなり違ってきます。

言語活動では何らかのアウトプットがなければ助言や評価はしにくいので、生徒に書かせたり発表させたりすることが多いのは確かです。しかし、書いたり声に出したりすることが必須というわけではありません。言語活動の本質は、生徒に「考えさせること」にあります。書いたり話したりする前提として、どれだけ生徒が考えたり工夫したりしているかが大切です（図3）。

言語活動充実のヒントを 教科の垣根を超えて共有する

これまで教科の評価は、知識が習得できたかどうかという点が重視されてきました。しかし、これからは生徒が自分の考えを持てたかどうかといった観点から、生徒の成長を見つめることが大切になるでしょう。たとえ正解ではなくても、自分の意見を持てたというの大切なことです。調べ学習で、いつもインターネットの情報を丸写ししていた生徒が、複数の資料を組み合わせてレポートを書くようになったら、それも大きな前進です。評価の観点や角度を少し変えることで、これま

では違う側面から生徒の成長を実感できるようにするのはないでしょうか。

私が中学校教師をしていた時も、学力を身に付けさせようと教え込みばかりになったり、一見多くの生徒に発言させていても、実は一つの正答に向かわせたりする授業をしがちでした。しかし、大学や社会で必要とされるのは、自分で課題を見つけて解決する力、必要に応じて学び続ける力、困難にめげない粘り強さや忍耐力などの力です。大学ではレポートや論文が書けるかどうか勝負ですし、社会に出れば各自で工夫や改善が出来る人材が求められます。

回り道に思えても、こうした力の土台を中学校の3年間で身に付けさせる授業こそが大切ではないでしょうか。言語活動はそのための良い学習の機会になるはずで、教科の垣根を超えて

先生方の知見を共有し合う場を設ければ、より多く工夫のヒントが見つかります。管理職やリーダーの先生方の主導の下、ぜひ、学校全体で言語活動を取り入れたより良い授業づくりに取り組んでいただきたいと思います。

図3 言語活動を意識した授業の工夫例

あと少しで「思考を伴う」言語活動を		ひと工夫して…	「思考を伴う」言語活動に
国語	形容詞の活用形をペアワークで言い合う 説明文で筆者の言いたいことは何かを読み取る	「あの人は『かわいい』」を別の言葉に置き換え、それを具体的な場面を想像しながら言い換えて、整理する 説明文に書いてあることを踏まえて、自分はどうかを書く	
社会	教師が言ったポイント部分にマーカーを引く	前時の学習内容を踏まえて、大事だと思う部分にマーカーを引く	
数学	一次関数の素材を与えてグラフを書く	身近にある一次関数の例を探すことを宿題で出し、授業でそれをグラフにする	
理科	だ液の働きを調べる実験を行い、結果をワークシートに書く	だ液の働きを調べる実験を行う際に、結果を予想し、実験結果から何が分かったのかを考察し、グループ内で意見交換する	
音楽	CDを聴いて、感想を書く	楽譜を見ながらCDを聴き、「ここはスタックカートが使われているから軽やかな感じがする」など曲想を友だちと意見交換する	
美術	ゴッホやレンブラントの作品を参考に自画像を描く	自分の作品を発表し、他の生徒の作品について感じたことやアドバイスをワークシートに書く	
保健体育	サッカーゲームを楽しむ	ワールドカップのビデオを観て、一流選手の身体の動きはどうかを話し合う	
技術・家庭	情報モラルのハンドブックを読む	最近起きた著作権違反やネットワーク犯罪の事件から、なぜそれがいけないことかを話し合う	
外国語	教科書の内容をペアワークで暗唱する	教科書の表現を日本語の同じ意味の表現と比較して、なぜ異なるのかを、(日本語で)考えたり調べたりする	

* 田中教授のインタビューを基に編集部で作成